

【 復活のトロパリ 第7調 】



ハリストス か 神 み よ 、 なん ぢ は じゅ う じ か に て し を 死
ぼ ろ ぼ し 、 と う ぞ く の た め に ら く えん を ひ
滅 盗 賊 の 爲 楽 園 開
ら き 、 け い こ う ぢ ェ の か な し み を な ぐ さ
攜 香 女 悲 慰
め 、 し と に なん ぢ が ふ く か つ し て 、 せ か
使 徒 爾 復 活 世 界
い に お お い な る あ わ れ み を た ま い し を つ た え
大 憐 賜 傳
さ せ た ま え り 。
給

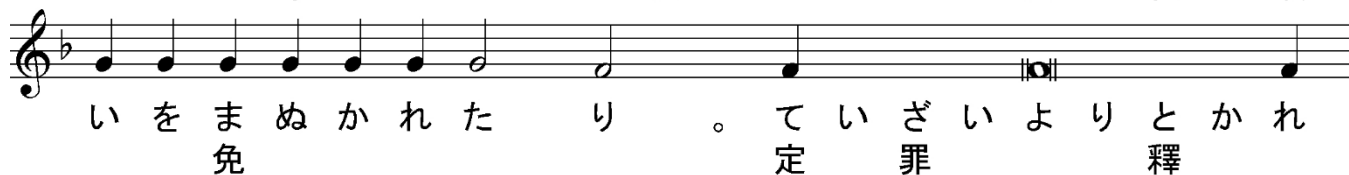
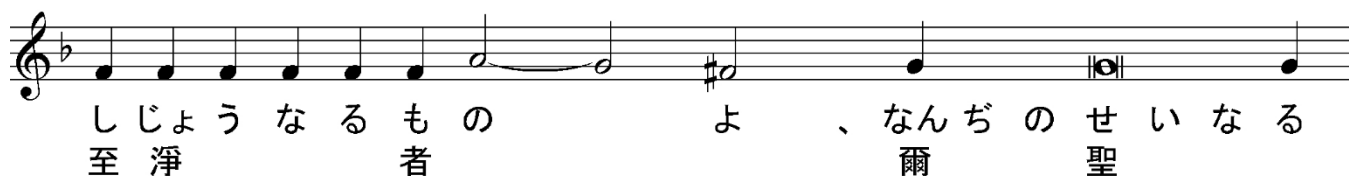
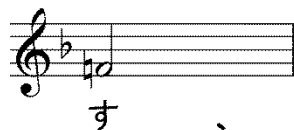
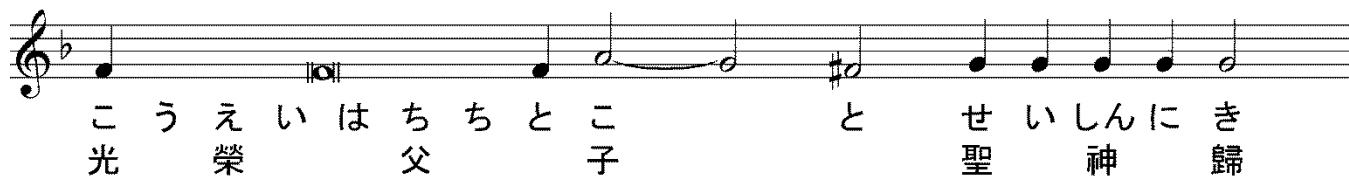
【 生神女誕生祭のトロパリ 第4調 】



し ょ う し ん ど う て い ぢ ェ お よ 、 なん ぢ の う ま れ
生 神 童 貞 女 爾 誕 生
は ぜん せ か い に よ ろ こ び を し ら せ た り 、 け
蓋 全 世 界 飲 喜 知
だ し なん ぢ よ り ぎ の ひ た る ハ リ ス ト ス わ が か み は か が
爾 義 日 我 神 輝
や け え り 。 か れ は の ろ い を と き て し ゅ く
彼 詛 解 祝
ふ 福 く を あ た え 、 し を ほ ろ ぼ し て わ れ ら に
死 滅 我 等



【 生神女誕生祭のコンダク 第4調 】



【 復活のコンダク 第7調 】



い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
今 何 時 世 世
し の け ん は す で に ひ と び と を と ら う る あ た
死 権 已 人 人 捕 能
わ ず 、 け だ し ハ リ ス ト は く だ り て そ の ち 力
蓋 降
か ら を や ぶ り て ほ ろ ぼ し た ま え り 。 ぢ ご 獄
敗 滅 給 地 獄
く は し ば ら れ 、 よ げ ん し ゃ は ど う し ん に よ ろ
縛 預 言 者 同 心 喜
こ び て よ ぶ 、 き ゅ う せ い し ゅ は し ん に お る
呼 救 世 主 信 居
も の に あ ら わ れ た り 、 し ん じゃ よ 、 ふ く
者 現 信 者 復
か つ つ し て い で よ 。
活 出

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有
となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾
り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に
痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が
聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる
者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の
仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈

からだ せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
と 體 とを聖にし、我等に 生涯善功を以て 爾に務むるを得せしめ給え、聖

しょうしんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょうせいじん きとう よ
なる 生 神女と古世より 爾の 喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を 爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖
じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐
よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖
な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐
め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅
せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐
れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い しん
光 榮 父 子 聖 神
に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主^{しゅ}の名^なに依^よりて來^きたる者^{もの}は崇^{あが}め讃^ほめらる、ヘルヴィムに座^ざする者^{もの}よ、爾^{なんぢ}は其^{その}國^{くに}

の光^{こう}榮^{えい}の寶^{ほう}座^ざに在^ありて恒^{つね}に崇^{あが}め讃^ほめらる、今^{いま}も何^{いつ}時^よも世^よに、)

【 プロキメン 提綱 十字架舉榮祭前の主日 第6調 及び 生神女の歌 第3調 】

司祭) 慎^{つつし}みて聽^きくべし、衆^{しゅうじん}人^{へいあん}に平^{へい}安^{あん}、

誦經) 爾^{なんぢ}の神^{しん}にも、

司祭) 睿^{えいち}智^ち、

誦經) プロキメン、第^{だい}六^{ろく}の調^{しらべ}、主^{しゅ}よ、爾^{なんぢ}の民^{たみ}を救^{すく}い、爾^{なんぢ}の業^{ぎょう}に福^{ふく}を降^{くだ}し給^{たま}え、

しゅ よ 、 なんぢ の た み を す く い 、 なんぢ の ぎ ょ う に
 主 爾 民 救 爾 業
 ふ く を く だ し た ま え 。
 福 降 給

誦經) 主^{しゅ}よ、我^{われ}爾^{なんぢ}に呼^よぶ、我^{われ}の防^{かため}固^めよ、我^わが爲^{ため}に黙^{もだ}す母^{なか}れ、

しゅ よ 、 なんぢ の た み を す く い 、 なんぢ の ぎ ょ う に
 主 爾 民 救 爾 業
 ふ く を く だ し た ま え 。
 福 降 給

誦經) ^{だいさん しらべ わ たましい しゅ あが わ しん かみわ きゅうしゅ よろこ} 第三の調、我が霊は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。



【 使徒經 215 端 ガラティヤ書 6 章 11～18 節 (十字架擧祭前の主日)

181 端 コリント後書 6 章 1～10 節 (第 16 主日)

240 端 フィリッピ書 2 章 5～11 節 (生神女誕生祭)

】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パウエルがガラティヤ人^{じん たつ}に達する書^{しょ}の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい み われて なんぢら いくばく おお} 兄弟よ、視よ、我手づから爾等に幾許^{しょ}も多く書したるを。肉を以て誇らんと欲する

^{もの なんぢら し かつれい う ただ じゅうじか ゆえ よ きんちく} 者が、爾等を強いて割禮を受けしむるは、唯ハリストスの十字架の故に由りて、窘逐を

^{う ため けだしかつれい う もの おのれ りつぼう まも しか なんぢら かつれい} 受けざらん爲のみ。蓋割禮を受くる者は、己も律法を守らず、然るに爾等に割禮

^{う ほう なんぢら にく もつ ほう ため われ あ われら しゅ} を受けしめんことを欲するは、爾等の肉を以て誇らん爲なり。我に在りては、我等の主

^{じゅうじか ほか ほう ところ これ よ よ われら ため てい} イイスス ハリストスの十字架の外に誇る所なし、此に由りて世は我等の爲に釘せられ

^{われよ おい またしか けだし あ かつれい う かつれい} たり、我世に於ても亦然り。蓋ハリストス イイススに在りては、割禮を受くるも、割禮

^{う えき ただあらた じゅぞうぶつ えき およ こ のり したが おこな もの} を受けざるも益なく、惟新なる受造物は益あり。凡そ此の規に遵いて行^う者は、

^{ねが へいあん じれん こうむ かみ またしか いま のちひとわれ わづらわ} 願わくは平安と慈憐とを蒙らん、神のイズライリも亦然り。今より後人我を擾す

^{なか けだしわれ しゅ きず わ み お けいてい ねが われら しゅ} 勿れ、蓋我は主イイススの瘡痕を我が身に負えり。兄弟よ、願わくは我等の主イイスス

^{おんちよう なんぢら しん とも あ} ハリストスの恩寵は爾等の神と偕に在らんことを、「アミン」。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。ごらんなさい。わたし自身いま筆をとって、こんなに大きい字で、あなたがたに書いていることを。いったい、肉において見えを飾ろうとする者たちは、キリスト・イエス

の十字架のゆえに、迫害を受けたくないばかりに、あなたがたにしてい割礼を受けさせようとする。事実、割礼のあるもの自身が律法を守らず、ただ、あなたがたの肉について誇りたいために、割礼を受けさせようとしているのである。しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである。割礼のあるなしは問題ではなく、ただ、新しく造られることこそ、重要なのである。この法則に従って進む人々の上に、平和とあわれみとがあるように。また、神のイスラエルの上にあるように。だれも今後は、わたしに煩いをかけないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に帯びているのだから。兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アアメン。

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^{われら}我等は^{どうろうしゃ}同労者として^{なんぢら}爾等に^{もと}求む、^{かみ}神の^{おんちよう}恩寵を^{いだづら}徒に^う受くる^{なか}勿れ。^{けだし}蓋

^い言えるあり、^い納るべき^{とき}時に^{われなんぢ}我爾に^き聴き、^{すくい}救の^ひ日に^{なんぢ}爾を^{たす}助けたりと。^み視よ、^{いま}今は^よ嘉く^い納る

^{とき}べき時、^み視よ、^{いま}今は^{すくい}救の^ひ日なり。^{われら}我等何^{なに}事に^{おい}於ても^{つまづき}蹟を^{ひと}人に^お置かず、^わ我が^{つとめ}職の^{そしり}謗

^うを受けざらん^{ため}爲なり。^{われら}我等凡^{こと}の事に^{おい}於て^{おのれ}己を^{かみ}神の^{えきしゃ}役者と^{あらわ}顯す、^{すなわち}即^{おお}多くの^{にんたい}忍耐

^{かんなん}に、^{きゆうぼう}患難に、^{こんく}窮乏に、^{ぼくけい}困苦に、^{きんごく}扑刑に、^{そうらん}禁獄に、^{きんろう}争亂に、^{けいせい}勤勞に、^{きんしよく}徹醒に、^{きんしよく}禁食

^{けつじよう}に、^{ちしき}潔淨に、^{ごうにん}知識に、^{じんじ}恒忍に、^{せいしん}仁慈に、^{いつわり}聖神に、^{あい}偽なき^{しんじつ}愛に、^{ことば}眞實の^{かみ}言に、^{かみ}神

^{ちから}の^{おい}能に^{さゆう}於てし、^て左右の^ぎ手に^{ぶぐ}義の^{もつ}武具を^{そんえい}以てし、^{ちじよく}尊榮^{あくひよう}及び^{れいぶん}耻辱に、^{れいぶん}惡評^{れいぶん}及び^{れいぶん}令聞に

^{おい}於てす、^{あざむ}欺く^{もの}者に^{まこと}似たれども、^し眞なり、^し知られざるに^し似たれども、^し知られ、^し死したるに^に似た

^{れども}れども、^み視よ、^い生けるなり、^{ばつ}罰を^う受くるに^し似たれども、^し死に^{わた}付されず、^{うれ}憂うるに^に似たれども、^{つね}常

^{よろこ}に^{まづ}喜び、^に貧しきに^{おお}似たれども、^{もの}多くの^と者を^あ富ませ、^に有るなきに^あ似たれども、^あ有らざるなし。

(比較用 口語訳) わたしたちはまた、神と共に働く者として、あなたがたに勧める。神の恵みをいたずらに受けてはならない。神はこう言われる、「わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救の日にあなたを助けた」。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。この務がそしりを招かないために、わたしたちはどんな事にも、人につまずきを与えないようにし、かえって、あらゆる場合に、神の僕として、自分を人々にあらわしている。すなわち、極度の忍苦にも、患難にも、危機にも、行き詰まりにも、むち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、眞実と知識と寛容と、慈愛と聖霊と偽りのない愛と、真理の言葉と神の力とにより、左右に持っている義の武器により、ほめられても、そしられても、悪評を受けても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている。わたしたちは、人を惑わしているようであるが、しかも眞実であり、人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている。

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^{なんぢら}爾等は^{こころ}ハリストス^{もつ} イイススの^{こころ}意を^{かれ}以て^{かみ}意と^{かたち}すべし。彼は^{かみ}神の^{かたち}像にして、

^{かみ}神と^{ひと}匹しくなることを^{ひとごろ}僭^{しか}うとせざりき、^{おのれ}然れども^{むな}己を^{ぼく}虚しくして、^{かたち}僕の^う貌を受け、

ひと おな もの な がいけい おい ひと ごと おのれ ひく し いた したが
 人と同じき者と爲りて、外形に於て人の如くなり、己を卑くして、死に至るまで順
 い、^{かつじゅうじ か し いた ゆえ かみ かれ むじょう たか}且 十字架の死に至れり。故に神も彼を無上に高くして、彼に凡の名に超ゆる名
 を賜えり、^{たま およ てん あ ち あ およ ち した あ もの ひざ}凡そ天に在り、地に在り、及び地の下に在る者の膝は、イエスの名の前に屈
 み、^{かつおよそ した しゅ う みと こうえい かみちち き ため}且凡の舌はイエス ハリストスが主たるを承け認めて、光榮を神父に歸せん爲な
 り。

(比較用 口語訳) キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしくして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

【 アリルイヤ 十字架擧榮祭前の主日第1調 及び 生神女誕生祭の第8調 】

誦經) ^{われたみ えら もの あ}アリルイヤ、我民より選ばれし者を擧げたり、



誦經) ^{わ てつね かれ とも わ ひちかれ かた}我が手恒に彼と偕にし、我が臂彼を固めん、



誦經) ^{ぢょ これ き これ み なんぢ みみ かたぶ}女よ、之を聴き、之を觀、爾の耳を傾けよ、



司祭) (黙誦：人^{ひと}を愛^{あい}する主^{しゅさい} 宰^わよ、我が心^{こころ}に神^{かみ}を知る智慧^しの 淨^{ちえ}き光^{いきぎよ}を輝^{ひかり}かし、我が思^わし
 念^{ねん}の目^めを啓^{ひら}きて、爾^{なんぢ}が福^{ふく} 音^{いん}の 教^{おしえ}を悟^{さと}らしめ給^{たま}え、我が衷^わに 爾^{なんぢ}の福^{ふく}たる 誠^{いましめ}
 を畏^{おそ}る 畏^{おそれ}をも入^いれて、我等^{われら}が 悉^{ことごと}く の 肉^{にく} 體^{たい}の 慾^{よく}を踏^ふみ、凡^{およ}そ 爾^{なんぢ}の 喜^{よろこ}ぶ
 所^{ところ}を思^{おも}い且^かつ 行^{おこな}いて、屬^{ぞく} 神^{しん}の 生^{せい} 活^{かつ}を過^すぐるを致^{いた}させ給^{たま}え、蓋^{けだし} ハリス^{かみ}トス神^{しん}
 よ、 爾^{なんぢ}は我が 靈^{たましい} と 體^{からだ} との 光^{こう} 照^{しょう}なり、我等^{われら} 爾^{なんぢ} と 爾^{なんぢ}の 無^む 原^{げん}の 父^{ちち}と至^し聖^{せい}至^し
 善^{ぜん}にして生^{いのち}命^{ほどこ}を 施^{なんぢ}す 爾^{しん}の 神^{こうえい}とに 光^{けん} 榮^いを獻^{いつ}ず、今^よも何^い時^{いつ}も世^よ世^よに、アミン。)

【 エヴァンゲリオン
 福 音 經 イオアン福音書 9 端 3 章 13～17 節 (十字架舉榮祭前の主日)
 マトフェイ福音書 105 端 25 章 14～30 節 (第 16 主日)
 ルカ福音書 54 端 10 章 38～42 節、11 章 27～28 節 (生神女誕生祭) 】

司祭) 睿^{えいち}智^{つつし}、肅^たみて立^{せい}て聖^{ふく} 福^{いん} 音^{けい} 經^きを聴^{しゅう}くべし、衆^{じん} 人^{へい}に平^{あん} 安^{あん}、



司祭) イオアン傳^{でん}の聖^{せい} 福^{ふく} 音^{いん} 經^{けい}の讀^{よみ}、



司祭) 謹^{つつし}みて聴^きくべし、主^{しゅい} 謂^{てん}えり、天^{くだ}より降^{ひと}りし人^この子^な、仍^お 天^{てん}に在^ある者^{もの}の外^{ほか}に、天^{てん}に升^{のぼ}り
 し者^{もの}なし。モイセイが野^のに在^ありて蛇^{へび}を舉^あげし如^{ごと}く、人^{ひと}の子^こも是^かくの如^{ごと}く舉^あげらるべし、凡^{およ}そ
 彼^{かれ}を信^{しん}ずる者^{もの}の亡^{ほろ}ぶるなく、乃^{すなわ}ち永^{えい} 遠^{えん}の生^{いのち} 命^えを得^{ため}ん爲^{けだし}なり。蓋^よ 神^{あい}は世^{その}を愛^{あい}して、其^{その}

どくせい こ たま いた およ かれ しん もの ほろ すなわちえいえん いのち え ため
獨 生の子を賜うに至れり、凡そ彼を信ずる者の亡ぶるなく、乃 永遠の生命を得ん爲
なり。蓋 神が其子を世に 遣 ししは、世を定 罪せん爲に非ず、乃 世の彼に由りて救
われん爲なり。

(比較用 口語訳) 主は彼らに言われた、「天から下ってきた者、すなわち人の子のほかには、だれも天に上った者はない。そして、ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」。神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである」。

司祭) しゅ さ たとえ もう い てんこく た ち ゆ そのしよぼく め かれら その
主は左の 譬 を設けて曰えり、天 國は他の地に往かんとして、其 諸 僕を召し、彼等に其
しよゆう たく ひと ごと ひとり ぎんごせん ひとり にせん ひとり いっせん おのおのそのさい
所 有を託したる人の如し。一人には銀五千、一人には二千、一人には一 千、各 其才
のう おう これ あた ただち た ゆ ごせん う もの ゆ これ もち た
能に應じて、之を與えて、直 に起ち行けり。五千を受けし者は往きて、之を用いて、他
に五千を獲たり。二千を受けし者も亦二千を獲たり。惟 一 千を受けし者は往きて、之を地
に埋めて、其 主の銀を蔵せり。久しくして後、此の諸 僕の主 歸りて、かれら かいけい
に埋めて、其 主の銀を蔵せり。久しくして後、此の諸 僕の主 歸りて、彼等と會 計せ
り。五千を受けし者は他に五千を 攜 えて、就きて曰く、主よ、爾 五千を我に託せり、
み われこれ もつ た ごせん え そのしゅかれ い よ かな ぜん ちゅう ぼく
視よ、我 之を以て他に五千を獲たり。其 主 彼に謂えり、善い哉、善にして 忠 なる僕よ、
なんぢ すくな もの おい ちゅう われなんぢ おお もの つかさど なんぢ しゅ たのしみ い
爾は寡 き者に於て 忠 なり、我 爾に多く者を 督 らしめん、爾が主の歡樂に入
れ。二千を受けし者も亦就きて曰えり、主よ、爾 は二千を我に託せり、視よ、われこれ もつ
て二千を獲たり。其 主 彼に謂えり、善い哉、善にして 忠 なる僕よ、爾は寡 き者に於
て 忠 なり、我 爾に多くの者を 督 らしめん、爾が主の歡樂に入れ。一 千を受けし
もの またつ い しゅ われなんぢ げんこく ひと ま ところ か ち
者も亦就きて曰えり、主よ、我 爾が嚴 酷なる人にして、播かざりし 處に穫り、散らさざ
りし 處に聚むるを知れり、是を以て我 懼れて、往きて、なんぢ ぎん ち かく み
爾の物は 爾之を有てり。主 彼に答えて曰えり、惡くして 情れる僕よ、爾は我が
ま ところ か ち ところ あつ し ゆえ わ ぎん ぼうえきしゃ たく
播かざりし 處に穫り、散らさざりし 處に聚むるを知れり、故に我が銀を貿 易者に託す
べかりしなり、然らば我 來りて、本 銀と利とを受けしならん。故に彼より一 千を取りて、
じゅうせん も もの あた けだし およ も もの あた あまり も もの
十 千を有てる者に與えよ。蓋 し凡そ有てる者には與えて、餘 あらしめ、有たざる者

よ^{そのも}りは其^{もの}有^{うば}てる物も奪^{むえき}われん。無^{ぼく}益^{そと}なる僕^{くらやみ}を外^{とう}の幽^{かしこ}暗^{なき}に投^{はがみ}ぜよ。彼^{はがみ}處^{はがみ}には哀^{はがみ}哭^{はがみ}と切^{はがみ}齒^{はがみ}とあ

らん。言^いい畢^{おわ}りて呼^よべり、耳^{みみ}ありて聽^きくを得^うる者^{もの}は聽^きくべし。

(比較用 口語訳) 天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるようなものである。すなわち、それぞれの能力に応じて、ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを与えて、旅に出た。五タラントを渡された者は、すぐに行って、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。二タラントの者も同様にして、ほかに二タラントをもうけた。しかし、一タラントを渡された者は、行って地を掘り、主人の金を隠しておいた。だいぶ時がたってから、これらの僕の主人が帰ってきて、彼らと計算をしはじめた。すると五タラントを渡された者が進み出て、ほかの五タラントをさし出して言った、『ご主人様、あなたはわたしに五タラントをお預けになりましたが、ごらんのとおり、ほかに五タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。二タラントの者も進み出て言った、『ご主人様、あなたはわたしに二タラントをお預けになりましたが、ごらんのとおり、ほかに二タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。一タラントを渡された者も進み出て言った、『ご主人様、わたしはあなたが、まかない所から刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。そこで恐ろしさのあまり、行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金がございます』。すると、主人は彼に答えて言った、『悪い怠惰な僕よ、あなたはわたしが、まかない所から刈り、散らさない所から集めることを知っているのか。それなら、わたしの金を銀行に預けておくべきであった。そうしたら、わたしは帰ってきて、利子と一緒にわたしの金を返してもらえたであろうに。さあ、そのタラントをこの者から取りあげて、十タラントを持っている者にやりなさい。おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい。彼は、そこで泣き叫んだり、齒がみをしたりするであろう』。

司祭) 彼^かの時^{とき}、彼^{かれ}等^{そのい}が行^{むか}ける時^{そのしまい}、イイス^なス^{もの}ー^{そく}の村^かに入り^ざしに、或^{そのことば}婦^な マル^なファ^{もの}と名^なづくる者^{もの}、

彼^{かれ}を其^{そのい}家^{むか}に迎^{そのしまい}えたり。其^な姉^{もの}妹^{そく}にマリ^かヤと名^ざづくる者^{そのことば}あり、イイス^なスの足^な下に^{もの}坐^{そく}して、其^な言^{もの}

を聽^きけり。マル^きファ^きは 供^き事^きの多^ききに因^きりて 心^こを 煩^わわし、就^つきて曰^いえり、主^{しゅ}よ、我^わが姉^{しまい}妹^妹、

我^{われ}一人^{ひとり}を遣^{のこ}して 供^き事^きせしむるを 爾^{なんぢ}意^いと爲^なさざるか、之^{これ}に命^{めい}じて、我^{われ}を助^{たす}けしめよ。イイ

ス 彼^{かれ}に答^{こた}えて曰^いえり、マル^なファ^およ、マル^なファ^およ、 爾^{なんぢ}は多^おくの事^{こと}を 慮^{おも}りて 心^こを 勞^{ろう}せ

り、然^{しか}れども 需^{もと}むる 所^{ところ}は 一^{ひとつ}のみ。マリ^なヤは善^よき分^{ぶん}を 擇^{えら}びたり、是^{これ}は彼^{かれ}より 奪^{うば}う可^べからず。

此^{これ}を言^いう時^{とき}、一^{ひとり}の 婦^{おんな}民^{たみ}の中^{うち}より 聲^{こえ}を揚^あげて、彼^{かれ}に謂^いえり、 爾^{なんぢ}を 孕^{はら}みし 腹^{はら}と 爾^{なんぢ}が 哺^す

いし乳^ちとは 福^{さいわい}なり。彼^{かれ}は曰^いえり、然^{しか}り、神^{かみ}の 言^{ことば}を 聽^ききて 之^{これ}を 守^{まも}る者^{もの}は 福^{さいわい}なり。

(比較用 口語訳) イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとirimだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方

を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀3（金口イオアン）へ